

# St. Luke's International University Repository

Developing educational material to promote  
inclusive care for LGBTQ+ families

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五十嵐, ゆかり, 青木, 美紀子, 浦口, 真奈美, 岡, 美雪, 下田, 佳奈, Igarashi, Yukari, Aoki, Mikiko, Uraguchi, Manami, Oka, Miyuki, Shimoda, Kana メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.34414/00016721">https://doi.org/10.34414/00016721</a>

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 多様な家族へのケアの探究をリードする教材の開発

五十嵐ゆかり 青木美紀子 浦口真奈美 岡 美雪 下田 佳奈

### Developing educational material to promote inclusive care for LGBTQ+ families

Yukari IGARASHI Mikiko AOKI Manami URAGUCHI  
Miyuki OKA Kana SHIMODA

#### [Abstract]

As society changes, the definitions and relationships of families have become more diverse. Regarding sexual diversity in families, much attention has been paid to matters relating to the children's sexual orientation and gender identity, but not to their parents'. The approach of providing care for the entire family is an essential element of perinatal nursing. Assessing family relationships and other aspects of the family to identify potential health problems and provide care is necessary to understanding the family's situation. The purpose of this educational material is to help nursing students reflect on their own images and values of family, learn about family diversity, and provide unbiased professional care to individuals and families. The educational material consists of interviews with five LGBTQ+ families, each lasting approximately 30 minutes. As a result of interacting with these educational materials in their sexual health course, the students indicated that they became aware of their own understandings, values, and biases regarding family, sexuality, and family diversity in ways they hadn't been before. Students also shared that the educational materials gave them a new perspective and encouraged them to understand the choices/situations of others. This indicates that exposure to these materials leads students to develop objective views of their own thoughts and feelings. In the future, these educational materials could be utilized in other subjects, depending on the course topic, to promote inclusive care for LGBTQ+ families.

[Key words] LGBTQ+ Family, LGBTQ+, Video Educational Material

#### [要 旨]

社会の変化に伴って、家族の構成員の人数や関係性などが多様化している。家族における性の多様性については、これまでは子どもの性的指向や性自認に関することへの注目が多かったが、親については注目されてこなかった。周産期看護学は家族への看護の視点は不可欠である。家族の関係性などをアセスメントして、健康問題を捉えケアを提供していくが、まずは家族の状況を理解する必要があるため、実習の前に多様な家族の存在を学ぶことは家族へのかかわりのための準備ともいえる。本教材の目的は、自己の持つ家族のイメージや価値観等を振り返ること、また、家族や多様性について学ぶとともに専門職者としての個人、家族の理解につなげること、とした。教材の構成は5つの家族のインタビューとし、1家族約30分とした。作成した教材を、セクシャルヘルスという科目で使用した結果、学生の様子から、自分が意識していなかった事柄に気が付いたり、理解しようとする姿勢がみられた。これから自分の考えや感情を客観視することにつながっていくのではないかと思う。今後は多領域でも教材を使用できる

ように科目間の調整を行っていききたい。

〔キーワード〕 多様な家族, LGBTQ+, 映像教材

## I. はじめに

家族は多様化している。社会の変化とともに世帯は核家族化へと移行し、さらに晩婚化から少子化、あるいは未婚者が増加し、家族の大きさが徐々に変化してきた。そして、生殖補助医療による親子、養子や里子を迎える家族、あるいはステップファミリーなど、親が複数であったり、非血縁の親子であったりなどと多様化してきた。2015年に東京都渋谷区で同性婚を認める条例が成立したことから、さらに家族の多様性についても議論されるようになった。このことに関連して、家族における性の多様性については、これまででは子どもの性的指向や性自認に関することが多かったが<sup>1)</sup>、親の性の多様性については注目されてこなかった。周産期看護学は家族への看護の視点は不可欠である。家族の関係性などをアセスメントして、健康問題を捉えてケアを提供していくが、まずは家族の状況を理解する必要がある。その事前学習として、実習の前に多様な家族の存在を学ぶことは家族へのかかわりのための準備ともいえる。

学部3年次、学士編入3年次の必修科目である「セクシャルヘルス」において、2020年からLGBTQ+当事者より特別講義を行って頂いた。学生の感想は非常に好意的であったものの、戸惑いを覚えたり緊張したという反応もあった。また自身の性的指向や性自認の気づきにつながった学生もあり、医療者としてLGBTQ+当事者の背景を理解したプロフェッショナルな態度についての学びのみにとどまらず、「ジェンダー」や「ダイバーシティ」について熟考する機会にもなった。

このような学びは、「包括的性教育（性に関する知識やスキルだけでなく、人権やジェンダー観、多様性、幸福を学ぶための重要な概念）」としても多様性の理解のためには非常に重要であり、国際的に広く認知・推進されている。しかし、繊細な事象でもあることからLGBTQ+当事者への看護の調査・研究は進んでいないため、ケアを探究するための根拠となる研究結果などを基盤とした学びを提供するのは困難な状況にある。特に、多様な性に対するケアの学びを深めていくための適切な教材が不足している。一般的な教材としては、課題となる状況をドラマ化し、人権および倫理に注目したものは多く作成されているが<sup>2)</sup>、実際の医療現場における課題に注目した教材はない。そのため、筆者は「医療現場における性の多様性（全2巻；丸善出版）」<sup>3)</sup>という教材を作成した。構成は事例と当事者からのフィードバック

とし、事例は性的指向や性自認を考慮し作成した。LGBTQ+当事者へのケアを学んだり考えたりする機会を提供する教材として、視聴した方々から高い評価を得た。

この教材による学びの様子から、本事業では個人から家族へと視点を広げ、性の多様性とその家族に注目した教材の作成を目的とした。それぞれの持つ家族のイメージや価値観を振り返るきっかけとなるとともに、多様性、対象理解、家族への看護について考える機会を持つことを目指した。

## II. 本教材の意義

広義でのダイバーシティ・フレンドリーな医療者の育成を目指し、本教材を使用した学びとして以下の3つをポイントとした。

### 1. 自己の反応を知る

多様な背景を持つ患者やその家族が存在することについては、理解していても実際に出会った経験がなければ具体的な状況は想像の域を出ない。そのため、まずは本教材によって、当事者の現状を知ることで、実際に出会ったときの感情の動きを知り、自分の反応を客観的に観察することができる。

### 2. 多様性に対する理解を促進する

これまでの教育や環境の中での生物学的な性別である男性と女性を基盤とした性的役割や性的指向の考えなどを知る機会となる。また、多様な背景を持つ患者やその家族の状況を学ぶことにより、多様性に対する理解を深めながら、医療者としての態度や対応を考えるきっかけとなる。

### 3. 繰り返しの学びにより柔軟性を育む

映像教材で繰り返し学ぶことで、本来はその場で終わってしまう状況であるが、教材では何度も振り返ることができる。繰り返し振り返って改善していくことで、より良いケアについて考察することにつながる。

## III. 教材の作成過程

### 1. 教材の目的

Trans voice in Japan代表で看護師である浅沼智也氏

からアドバイスを受けながら、医療現場においてケアが不足している点と看護師がケアを考える上で必要なディスカッションポイントについて検討を行った。本教材の目的は、自己の持つ家族のイメージや価値観等を振り返ること、また、家族や多様性について学ぶとともに、専門職者としての個人、家族の理解につなげることを、とした。

## 2. 教材の構成と事例の設定

多様な背景を持つ対象やその家族のリアルな思い、状況を伝えてもらうため、教材の構成は、全編にわたりインタビューを通して語ってもらうこととした。浅沼智也氏を通じて対象者をリクルートし、教材の趣旨を説明して出演に同意してくださる方を募った。結果、教材へ出演してくださったのは以下の家族であった。

- 1) FTM (Female to Male) に性別移行し、実兄から精子提供を受けた2人の子どもと妻との家族
- 2) 女性との離婚歴があり、同性パートナーとともに歩む男性
- 3) 男性の同性カップルで養子縁組をした家族
- 4) 女性の同性カップルでお互いに男性と子どもをもうけた後に離婚し、家族となったステップファミリー
- 5) 結婚15年後にMTF (Male to Female) に性別移行した3人の子どもと妻との家族

## 3. インタビューガイドの作成

教材の目的に合わせ、インタビューガイドを作成した。質問項目は、家族とは誰か、家族に対する考えや思い、子どもを迎えることによる気持ちの変化などについての10項目とした。

## 4. 出演協力者との打ち合わせと事前インタビュー

撮影に先立ち、質問項目についてそれぞれの出演協力家族とオンラインで打ち合わせを行った。撮影の日程調整とともに、撮影方法などの説明を行った。また、質問項目について意見をもらうとともに、事前インタビューとして、質問項目にも実際に答えてもらった。事前インタビューは1家族約60分で、同意を得て録画した。録画した内容から逐語録を作成し、実際に撮影する場面を選択し、撮影当日に使用するセリフを作成した。

## 5. インタビュー内容の確認

事前インタビューから抽出したセリフが家族の意図と相違はないか出演協力家族に確認を行った。修正があれば直接加筆してもらい、撮影のための最終のセリフを完成させた。

## 6. 撮影の実際

撮影は、2022年1月～2022年3月に行った。撮影開始前に全員がCOVID-19の抗原検査を行い、陰性を確認した上で撮影を行った。撮影者と出演者が密にならないようにスケジュールを調整し、また、マスク、フェイスシールド着用のほか、サーキュレーターを使用した換気の徹底と共有部分の定期的な消毒を行った。撮影時間は、1家族60～120分であった。

## 7. 映像の確認と編集

映像編集の担当者と会議を重ねながら、必要な場面の選択、字幕の内容の確認を行った。また、それぞれの家族の生活状況をイメージしやすくするため、インタビューの合間に日常生活状況の写真を挿入した。1家族、約30分の映像教材が完成した。

## IV. 教材の概要

ここからは各家族のインタビューの抜粋を紹介する。

### 1. FTMに性別移行し、実兄から精子提供を受けた2人の子どもと妻との家族 (写真1)



写真1. 家族1

質問：精子の提供をお願いしたとき、お兄さんはどんな反応でしたか？

まさきさん：今のパートナーと結婚する前にも実は精子提供の相談をしたことがあって。でもそのときは結婚していなかったので、兄もただのノリで言ってるんだろう、勢いで言ってるだけだろうって断られたことがあったんです。今回はちゃんと結婚もしていて、周りからAID(非配偶者間人工授精)の情報とか、そういう子たちが生まれたあとの子育てのプランとか、子作りをするための作業とか具体的な企画、プレゼンみたいなものをしたら納得してくれました。でもいきなり最初からOKではなくて、ちょっと考えさせてほしいって言われて、何日か待っていいよ、ていうことでした。

つきさん：そのときは嬉しかったです。だめかなって思っていたから嬉しかったです。

まさきさん：最初は病院に行かずにシリンジ法でトライ

したんですけど、なかなかできなくて。兄の方から不妊治療の病院でできないのかと言われました。

## 2. 女性との離婚歴があり、同性パートナーとともに歩む男性 (写真2)



写真2. 家族2

質問：パートナーはあなたにとってどのような存在ですか？

小吹さん：異性婚の“嫁さん”ではないが、それに近い、共に生涯を歩んでいくパートナー。一番わかりやすく言うと、異性婚での単身赴任。自分たちが歳を取って子どもたちが成長して、自分が介護状態になったとき、どうするかを考えたときに、彼も彼でむこうに仕事があるし、こっちにも仕事があるので、ふたりで共同で財産を残したいと思いました。私たちは、婚姻関係はないので、二人で合同会社を作って二人の財産をそこにおいて、片方が死んだら、もう一方に残りの財産が入るようにしています。法律上の婚姻関係は、同居して生計を共にしていて、お互い相互扶助でやっていくというのが原則ですが、実際は住民票が分かれていても単身赴任でも結婚できる。法律上の結婚とは何か？ということになります。私たちは、あっちとこっちを行ったり来たりしていて、一度も一緒に住んだことはないです。合同会社を作るなどの形で人生を共有しています。

## 3. 男性の同性カップルで養子縁組をした家族(写真3)



写真3. 家族3

質問：養子縁組に至るまでの他のご家族の反応はいかがでしたか？

竜也さん：最初は、公一郎は、お父さんに私の事を、年の離れた介護福祉士をやってる友達なんだよと、紹介しました。ただお父さんとしては、年も離れているし、

この馬の骨が分からないような子が一緒に住むことは、とても嫌だったようで、最初は関係があまり良くなかったです。一緒に住み始めて、食卓を囲んだ時に、二人がホモだったら出て行ってほしい、とお父さんが言ったんです。それに公一郎が激昂して、お父さんが考えているような関係ではない、と言ってから、二人についてお父さんは話をしなくなりました。でも、3人で暮らすうちに、私がそんなに悪い人ではないことを、お父さんも、なんとなく分かってくださるようになりました。

公一郎さん：もともと父との関係は良くなく、学生時代にも理解してもらえないというのもありました。家でも冷たくしていました。竜也は高齢者への話し方が上手で、父と竜也が話をするようになり、丁度うまくシフトしていったという感じです。あとは、父の体がどんどん弱っている中で、竜也は介護のエキスパートだから、色々ケアできるということでも信用してもらっています。

## 4. 女性の同性カップルでお互いに男性と子どもをもうけた後に離婚し、家族となったステップファミリー (写真4)



写真4. 家族4

質問：公的な制度で「家族」とされるために、変わってほしいと思うことはどんなことですか？

西川さん：結婚している人たちだったら当然受け取れるものがたくさんあります。それらを受け取れたらいいですね。

小野さん：男女の夫婦は多いですが、そこに結婚制度がないと考えてもらうといいかな。そうすると、皆さんはどう考えるかと、考えてほしいです。結婚式はできるけど、結婚の制度は使えない、結婚制度から派生しているすべてのこと、たとえば生活保障がない、いつまで暮らしていても同棲扱いにしかならない、と考えてもらいたいと思います。日常の中でそういう風を感じる事があまりにも多いです。会社の書面以外にも、人間関係のコミュニケーションの場面で感じる事が多いです。日々の雑談では、カミングアウトしないかぎり話せません。結婚制度のいいところは、「結婚している」と言えば説明しなくていいこと。自分も家族の話をしたと思って、結果的にそれがカミングアウトとなって、

大きさに感じてしまわないことがあります。小野さんって、秘密主義、腹を割ってくれてない、と思われるのですが、ただ、びっくりさせたり、受け止めきれない、と思わせたくはないからなんです。

## 5. 結婚15年後にMTFに性別移行した3人の子どもの妻の家族(写真5)



写真5. 家族5

質問：家族とはどんな存在ですか？

みどりさん：家族は家庭をつくるグループで家庭は安心できる居場所。利害関係がなく頼る頼られる人が家族。一緒に住んでいなくても「家族」が居る空間は安心できるし、離れていても安心できる存在。互いに理解できていなくても絶対的に許し合える存在だと思います。

エリンさん：自分ではどうにもならないと思ったときに真っ先に頼れる人が家族。私たちはケアしあう小さな団体。

みどりさん：家族って形がなくいいと思っています。

エリンさん：いうなら自然界のすべてが家族。

みどりさん：日本政府がいう家族は男と女のカップルに限定されているけど、それだけでなくいいと思っています。政府の言う形があっても心が通じ合っていない人はいる。それは家族ではない。わたしにとっては、家族は安心できる存在でなければなりません。家に泊まりに来る人もお客さんという意味ではなく、家族だと思っています。うちの実家もたくさん人が泊まりにくる家だったから、結婚してからもそうなった感じです。

## V. 学生の学び

2022年の必修科目のセクシャルヘルスで教材を視聴し、グループごとに、自分がどのように感じたのか、看護者としてどのような考えをもって看護を提供していくのか、についてディスカッションを促した。ディスカッションの目的は、グループごとに明確な答えを出すのではなく、自己の考えや思いをグループメンバーと共有すること、また、異なる感じ方がありそれぞれの考え方を否定せず多様であることを知ること、と説明した。各グループが話し合った内容は用紙にまとめて提出してもらい、クラウド型教育支援サービスmanabaで共有した。

グループでのディスカッションの内容や感想は以下のようのものであった。学生に許可を得た上で、その一部を紹介する。

### 1. 家族について

・「家族」にはいろいろなあり方があることを再確認できた。やはり当事者が「互いを家族だと感じるかどうか」が基準になるように思った。

・育ってきた環境や体験によって家族に対するイメージが異なると思うので、人によってどこまでが家族かわかりづらく、気にする機会が少ない。

・家族とは、時間を共有し生計を共にする他人同士のコミュニティ。

・書類上「家族」の定義付けは必要であるが、家族の在り方は個人の自由であり、他者に定義されるべきではない。自分が家族と思えば家族であり、各々の認識次第である。

・チームメンバーによっても、家族の概念が異なった。しかしながら、共通点として、家族と思う対象者に対し、精神的な結びつきを感じていたり、安心感を抱いていた。

・家族について深く考えたことがなかったため家族とは何か、という質問に対しての答えがあまり出なかった。

### 2. ディスカッションについて

・病院は多くの人を利用する場所だからこそ、率先してインクルーシブな表現を取り入れるなどして新たな基準を作っていく役割を担うことができるのではないかと考えた。過度に気を遣うのは良くないのかもしれないが、自分の中にある価値観に気付き、その都度修正していくことも必要なことだと感じた。

・想像以上に議論が盛り上がり、自分の中にはなかった視点に多く気がつくことができた有意義な時間となった。特に、何をもって家族と定義するかについて、多様な意見が出たのが興味深かった。

・センシティブな内容であるからこそ、意見が盛り上がる時はとても充実したグループワークが出来た。

・なぜ、病院ではいろんな場面において家族という枠組みをそこまで大切にしているのか疑問に思った。たしかに家族というのは大事だけど、法律でしっかりと決められた枠組みがあるわけでもないため、それなら身近な人でもいいのかと思った。

・グループワークで、家族について、悩みながらも考えることができた。そして、多様な家族の形態があることを理解し、その人たちに対する看護について考えることができた。

・家族についてや看護職者としての在り方、社会の中での性に対する認識について深く考えさせられた。

それぞれが問いに対して真摯に向き合い、ディスカッションを行っていた。自分が意識もしていなかった事柄に気づいたり、理解しようとする姿勢がみられた。今後、対象や家族をアセスメントし、看護を提供していく際に、自分の考えや感情を客観視することにつながっていくのではないかと思う。

## VI. 今後の課題

本教材を有効的に活用していくために、今後は以下のことを検討していきたい。

### 1. 教材の教育効果の評価

教材に対する感想や意見を聞き、学習効果の評価を行う。また、学年を変えての使用を検討し、学生のレディネスに合わせてディスカッション内容を変更して、教育的効果の評価につなげる。

### 2. 多領域との共有

本教材は、周産期看護学、遺伝看護学、養護教諭養成の領域と連携して作成した。看護職として多様な背景を持つ対象の理解という点と家族への看護という視点は、それぞれの科目でも科目目的に合わせ、教材を使用していく計画である。多領域で協働し、継続性のあるディス

カッションを行うこと、それぞれの看護領域における視点からのケアを検討すること、また継続的な視点をもって看護を考え続けることにもつなげていきたい。さらに、科目の範囲も広げ、もっと多くの領域で使用できるように科目間の調整を行っていきたい。

本教材は、2021年聖路加国際大学教育改革推進事業の助成を受けて作成した。

## 引用文献

- 1) 日高庸晴 (研究代表者). わが子の声を受け止めて性的マイノリティの子を持つ父母の手記. 平成26年度構成同労科学研究補助金エイズ対策政策研究事業個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究. 2014. [Internet] [https://www.health-issue.jp/syukisyu\\_s.pdf](https://www.health-issue.jp/syukisyu_s.pdf)
- 2) 法務省委託人権ライブラリー. 人権啓発ビデオ 「あなたがあなたらしく生きるために 性的マイノリティと人権」 [Internet] <https://www.youtube.com/watch?v=G9DhghaAxlo>
- 3) 五十嵐ゆかり, 浅沼智也 監修. 医療現場における性の多様性 (全2巻). 丸善出版; 2021.